

B 92

216

178

住持の本領

住持の本領

總論

中谷渡月



古へ大聖世尊が此土に御出現まじりて。廣く法藏を開て普く群生を濟ひ玉ふ。其御教化は殆ど五十年間に亘り。其御説法は三百餘會に延び。以て眞實の教法を天下に掲げ。出世の本懷を萬世に示されましれたが。其御入滅の時に當り。此正法を國王大臣及び四部の衆とて。僧と尼と信男信女との御付囑をなされましれた。是を涅槃經には如來今以無上正法付囑諸王大臣宰相比丘比丘尼優婆塞優婆夷是諸國王及四部衆應當勸勵諸學人等令得增上戒定智慧若有不學是三品法解怠破戒毀正法者王者大臣四部之衆應當苦治とあります。夫れ故印度の國では。佛滅後二百

年の頃。阿輸迦王が深く佛教に歸依し玉ひ。熱心に御弘通なされ
た結果として。西は波斯より南は錫蘭まで傳播致しました。其後馬
鳴龍樹提婆無着世親等の諸大士が御出世なされて。大乘の法門を御
弘めなされました。支那の國では。後漢の明帝の朝に。摩騰法蘭の
二人が初めて佛法を傳へ。魏晉齊梁隨唐宋の世には。勅命を以て三
藏を翻譯せしめ玉ひ。又高僧碩德が前後相繼で輩出せられて。廣く
國內へ弘められました。所謂支那十三宗は皆な此間に興きたのであ
ります。我日本帝國では。欽明天皇の御代に。百濟國王より佛像經
卷を獻せられ。其後聖德太子盛に弘め玉ひ。朝廷に於ても篤く御崇
敬あらせられ。其後古京の六宗の上。台密禪淨等の諸宗派が勃興し
て。遂に全國に蔓延し。今や歐米諸國にも漸次傳播の有様でありま
す。其間色々の變遷はありますけれど。三千年の久しきに亘り。數

萬里の廣に延び。先づ今日統計上四億己上の信徒があると云ふは。
元より大聖の威神力とは云ひながら。亦其囑託を受けたる者の護持
弘敷の力でありませふ。蓋し法は獨り自ら弘まるものでありません
そこで法の盛衰汗隆は。人の信不信と。護持不護持に依るものであ
ります。此を御式文には專修正行繁昌亦成自遺弟念力と仰せられ
た。すれば生れ難き人間に生れ。遇ひ難き妙法に遇はして貰ふた身
は。此廣大なる佛恩を念報せんが爲に。此妙法を護持せんと云ふ精
神が無ふてはならぬ。此が所謂自信教人信で。眞成報佛恩でありま
す。御和讃に他力ノ信ヲエンヒトハ。佛恩報ゼンタメニトテ。如來
二種ノ回向ヲ。十方ニヒトシクヒロムベシとあるも此道理で。住持
佛法と云ふ事が信徒たる者の第一の任務であります。そこで住持佛
法と云ふ事は。僧俗を問はず苟も此法海に沐する者は。是非とも務

めねばなりませぬ。然るに世間には此住持と云ふ意義を誤りて。自身に責任ある事を知らず。或は知りながらも其任務を盡さざる者がありますから。已下章を分ちて委く之を辨ト以て猛省を催します。

第一章 住持の名義

第二章 住持と僧侶の異同

第三章 寺檀の關係

第四章 眞宗と諸宗の相違

第五章 結論

第一章 住持の名義

先づ住持と云ふは。住とは停也止也と訓トて。とゞまると云ふ事。持とは執也把也と訓トて。にぎりたもつ事。住持と云ふ言葉は。或る物を此處にとゞめて。之を確乎とつかまへて居て捨てぬ様にすると云ふ程の意味である。今私がはなす住持と云ふは如何なる物を住持するのかと云へば。餘他の物ではなく。轉迷開悟の要法たる佛敎を住持するのであります。そこで住持と云ふは略語で。具には住持佛敎で。此佛敎をば飽くまで此世に住め。此妙法を持ちて行かふと云ふのである。然らば何者が此佛敎を住持するか。又此を住持せねばならぬ。責任あるものは誰人であるかと云へば。總論に涅槃經を引て辨トた如く。釋尊は御入滅の時に當りて。御付囑とて我が此世を隠れた後は。其方共に此法を譲るから。永く此法を住持して自

利々他せよとて。國王大臣及び四部の衆に御譲りなされまじた。世間でも親の遺言は大切なもので。此財産は長男に遺る。彼の田地は二男に與へると云へば。其子孫たるものは是非此を遵奉せねばなりませぬ。若し此を守らぬ様な人ならば。決して親孝行者ぢやとは申されぬのみならず。普通の人間とは云はれませぬ。今佛陀は一世や二世の親でなく。永生得脱の大神を受けたる眞實大悲の親であります。是を御和讃には釋迦彌陀ハ慈悲ノ父母と仰せられました。其眞實大悲の親たる佛陀の遺言を守りて。此を住持せねばならぬ責任のある者は。佛陀の付囑を受けたる一切の道俗でありますから。苟も此妙法を聞く者は。自ら此法を聞信すると同時に。廣く他人にも之を及ぼして。飽くまで此を住持し法城を嚴護せねば。折角佛陀の付囑を受けたる所詮はありませぬ。彼の南岳の慧恩禪師が我誓願持

令此經不滅至彌勤佛出と仰せられたる如く。人々個々に此精神がありさへすれば。佛教は永く住持する事が出来ます。之に反して人々に其精神が缺けたら。即ち佛教は廢てしまふのであります。彼の印度支那等に大乘佛教が亡びたといふのも。つまり此を住持するものがなくなつたからで。車はありても引き人がなければ輪らぬ如く。佛教も之を住持するものがなければ忽ち滅亡して仕舞ひます。そうなればよし黄卷赤軸の經文はありても。蠹魚の巢となりたり。學者の遊戯道具となりたりして。何の益にも立たぬことになりて仕舞ます。夫故一切の道俗たるもの。苟も此法に沐するものは。貴賤貧富を簡はず。男女智愚を論せず。自ら此難値難聞難得難信の妙法に依て出離得脱すると同時に。其廣大なる恩義に酬報せんが爲に。飽くまで此法を留住護持する責任があります。依て簡單に住持佛教

は何人の責任なりやと問へば。此に答へて一切の佛教信者なりと云ふ積りであります。然るに佛教信者の中で。此法を住持するは單に僧侶の責任のみの様に考へ。佛陀は又此法を滅後の僧侶のみ御付囑なされた様に考へる人がありますが。此は大なる了簡違ひで。早く云へば世間に親の遺狀を自身にも持てをりながら。親は財産をば他人にはかり護りたと思ふて居るも同様で。自身の責任を知らぬと云ふも實に困つたものであります。

第二章 住持と僧侶の異同

俗間に寺院の住職を住持さんと稱へる者がありますが。此は佛法を住持する者と云ふ意味より。遂に寺院を維持するものと云ふ意味迄加へて稱へる言葉になりたのでありませうから。先づ住持と僧侶の異同を辨ト。後ち寺檀の關係を辨トませう。

住持と僧侶の異同を辨するに就きて。先づ其名義を申さねばなりません。その中住持の名義は上に辨トしましたから略しまして。今は僧侶の名義に就きてのみ申します。この僧と云ふ文字は字引にヨステピトと訓トてあるのみにて。社會通途の學者は其意義を知るものが少なひ。或る漢學者は僧の字體によりて僧は人に從ひ。曾に從ふよりみれば。曾て人でありたと云ふことにてヨステピトと訓せしならんと解釋をしました。是實に笑ふべき事。併し世人の知らぬは尤であります。何者是は本梵語を音で譯したもので。義翻したものでなひからであります。此を支那語に反譯して衆と申します。翻譯名義集に僧伽とは大論に云く。奏には衆と言ふ。多比丘の一處に和合するこれを僧伽と名く。譬へば大樹の叢林これと名けて林となすが如し。淨名の疏に云く。律に四人以上を名けて皆衆と名つく。律鈔

に和合衆と云ふ。和合に二義あり。一には理和合謂く同トく擇滅を證するが故に。二には事和合別に六義あり。戒和は修を同ふ。見和は解を同ふ。身和は住を同ふ。利和は均を同ふ。口和は諍なし。意和は悦を同ふ等とありまして。多くの比丘一處に和合するをば僧侶と申しとす。それで元來は四人已上合同和合をば稱へる言葉なれども。今は一人の比丘でも之を僧と云ふのは。衆多和合すべき者と云ふ邊より云ふのであります。それでつまり僧とは出家の異名で釋氏要覽には出家の異名が澤山に擧げてありまして。沙門比丘。苾芻。僧除。禪男。善智識。長老。宗師。法主。大師。法師。律師。閑梨。勝士。尊者。開士。大德。上座。座主。上士。上人。道人。貧道。頭陀。支那。經流。龍象。空門子。宗主等。其他色々あります。何れも出家發心して佛道修行する者の名であります。

それを元より此僧侶は佛教を住持する責任のある事は當然であります。すが。佛教を住持するは僧侶のみの責任なりとは申されぬ事は。前章の住持の名義の下で辨ト九通りで。住持の責任は一切の道俗に通トす。

然るに俗人の中には佛教を信奉する者もあり。全で佛教に關係なく無宗教者や。外教を信トてをる人がありますから。俗人は悉く佛教住持の責任ありと云ふ事は出来ません。其住持の任務のある者は俗人の中の一部であります。而して僧侶は智愚老幼を問はず。一切悉く住持の責任があります。自分は愚かなから住持は出来ん。幼ひから其責任はないと云ふ事は云へません。それで僧侶は一切悉く住持佛教者でありますから。此邊から云へば僧侶をば住持者と云ふのを略して住持と云ふても宜しうあります。それで古來住持三寶と

云ふて。如來の滅後佛教を住持するのに三の寶があります。乃ち遺形畫像舍利等は住持の佛寶で。紙墨經卷等が住持の法寶で。滅後の沙門乃ち僧侶は住持の僧寶であります。此邊から云へばたとひ如何なる愚僧でも。どんな小僧でも悉く僧寶の隨一であります。十輪經には四種の僧侶あることを御示しなされて。一には第一義僧とは佛菩薩辟支及び四果の人等であります。二に清淨僧とは具足戒を持つもので。三に癡羊僧とは愚痴無智の人間で。四に無慚愧僧とは戒を破り後世を畏ぬ人と云ふ様なものであります。斯の如き四種の中。第三第四の僧の如きでも。苟くも出家でさへあれば此を尊敬せよとあります。昔に阿恕伽王が七歳の小僧を禮拜せられたと云ふのも。三寶の隨一と云ふ邊からであります。そこで今日如何なる愚痴幼若の僧侶でも。佛教弘通を妨げぬかぎりは。住持僧寶の隨一であります。

す。かように僧侶は住持僧寶の隨一なりと云ふ邊からは。僧侶をば住持と云ふても宜しくあります。

第三章 寺檀の關係

前章に辨ト如く。僧侶は専門に佛教を弘通する者で。在家は自身の職業がありますから。専門に身を教法弘通に任ねる譯には行き兼ねます。然るに出家は其れのみ身を投じて。經論祖釋を研究して。自らも信ト。人にも傳へますから。在家の人は自ら經論を讀まずとも。僧侶の教示を聞きさへすれば明に領解が出来ます。そこで在家の人は云はゞ自身に經論を研究する代りに。出家に仕で貰ふのであるから。出家の説法を聽聞すると同時に。其恩義に報ゆるため。出家の衣食住をば供給する義務があります。出家は又在家に向けて教法を開示すると同時に。衣食等は在家より供養を受くるからは

愈々教導を怠りてはなりませぬ。斯くの如く出家は法を施し。在家は財を施して。互に相助けて教法の弘通が出来ます。元來出家が供養を受ける事は如來白毫の恩賜で。佛藏經には出家者當一心行道隨順法行勿念衣食有所須者如來白毫相光功德百千萬億中留一分供諸末世弟子亦不能窮盡と御説きなされし又大聖釋尊は百歳まで御存命なされる筈の處をば。八十にして御入滅なされたは。二十年間の福分を末世の坊主の衣食に御殘しなされたのであります。無戒名字ノ比丘ナレト。末法五濁ノ世トナリテ。舍利弗目蓮ニヒトシクテ。供養恭敬ナス・メシムとありて。縱令如何なる愚痴の小僧でも。假りに袈裟衣を着して居れば。之を供養すれば廣大の利益があります。所謂一口もさどりの道を説く人は三世の佛の使ひなりけりであります。依て十住毘婆娑論には在家は財

施をせよ。出家は法施をせよとて。在家之人當行財施出家之人當行法施何以故在家之法施不及出家人以聽受法者於在家人信心淺薄故又在家之人多有財物出家之人於諸經法讀誦通達為人解説在衆無畏非在家者之所能及又使聽者起恭敬心不及出家又欲說法降伏人心不及出家とあります。今日世間には住々在家の身でありながら。信の上からの御報謝ならいざ知らず。中には唯た名聞利養の爲に。聽き覺へや御聖教の一端位心得たのを賣り歩て。遂に自らも惑ひ。人をも迷はしめ。自損々他の輩も間々あります。大に警戒すへき事であります。さて僧侶は衣食住どもに在家より仰ぐ者として。其僧侶の住居する處をば寺院とか精舎とか名けて。僧侶は此處に居て精練修行を致します。己に住居する寺院ある上は之を維持する者がなければならぬ

から。寺主と云ふ者が必要になり。遂に今日の所謂住職と云ふ者が出来たのであります。其が宗派が分れてからは。何宗の何寺と云ふ様になり。檀家信徒も何宗何寺の檀徒と云ふ様になり。此寺は此檀徒によりて維持し。彼の寺は彼の檀徒によりて保存するといふ様になりて。寺檀の關係が益々密接になりました。

依て一寺の住職は一方には佛教維持の責任があると同時に。又寺院維持の任務を帯びて居ります。斯くの如く一身に両面の住持の任務があると云ふ邊からは。住職を呼んで住持さんと云ふても宜しうあります。それで一寺の住職たるものは。常に門徒を教導し寺院を維持して居ります。然るに檀徒の中には住職の教導をは耳馴れて。奇を好み新を愛するの餘り。遂に説教や法話は必ず他所の教師に限る様に考へ。他の教師にのみ重きを置きて。其住職を輕んずる人があ

りますが。元より善知識は一人に局らず。因縁のある所何人にも聴き。汎く法味を愛樂するは宜しくありますけれど。譬て云へば住職は鶏の如く。他所の教師は鶯の如き者で。鶯は美き聲を出しますけれど春前ばかりの者で。良き聲と云ふ程にはなけれど。一年中時を報ずる者は鶏であります。依て他所より來た教師は。一回に五日か七日かの間なれども。住職は年中教導をして居りますから。縱令住職其人が充分にないとしても。之を輕蔑してはなりません。況や智徳兼備の人ならば猶更尊敬せねばなりません。既に佛法を住持し寺院を維持する邊から。口で住持さんと敬ふ上は。身も心もやはり恭敬せねばなりません。して其寺檀の關係に就き。眞宗と諸宗とは其趣を異にしますから。次に此を辨つさせふ。

第四章 眞宗と諸宗との相違

人は其面が異なるが如く。又其思想も別々であります。夫故佛陀の法門が八萬四千と分れ。隨て後世數多の宗派を分出しました。已に印度に於ても。釋尊御入滅後御弟子方其御説法を結集するにも。窟内窟外及び鐵圍山の結集と三通りに別れました。其中前の二は小乗の結集で。後の一は大乗の結集であります。其後窟内即ち上座部は十一に分れ。窟外即ち大衆部は九に別れ。大乘も亦有空二宗と分れました。支那に入りては。又此が毘曇。三論。成實。律。涅槃。地論。淨土。禪。攝論。天台。法相。華嚴。眞言の十三宗となりました。日本にては。初めに三論。成實。法相。俱舍。律。華嚴の六宗が傳り。其後天台。眞言。淨土。禪。眞宗。日蓮等の諸宗が興りまして。現今では法相。華嚴。天台。眞言。融通念佛宗。淨土宗。臨濟宗。曹洞宗。眞宗。日蓮宗。時宗。黃檗宗の十二宗に分れて。

其には又數多の派が別れて居りまして。其寺院と住職とを調査すれば。最近の統計は左の通りであります。

宗名	寺院	住職
眞宗	一萬九千五百五十五	一萬六千八百四十九人
曹洞宗	一萬四千六十二	一萬二千二百八十三人
眞言宗	一萬二千七百五十九	七千三百二十三人
淨土宗	八千三百十一	六千四百四十八人
臨濟宗	六千三百三十	四千八百八十三人
日蓮宗	五千六十	三千六百八十人
天台宗	四千七百九十四	二千八百四十七人
黃檗宗	六百五	三百六十一人
時宗	五百二十一	三百五十七人

融通念佛宗 三百五十八

百九十九人

法相宗 四十五

十四人

華嚴宗 二十一

十三人

斯の如くに數多の宗派があり。澤山の寺院住職がありますが。古今に亘り東西に通じて。畜妻噉肉を許されまじら祖師は。我が淨土眞宗より外はありません。今日では他宗の僧侶方の中には。内々で女を留ひ肉を噉ふ人もありますが。決して其宗の祖師よりは御許とはないのであります。我高祖が畜妻噉肉非僧非俗を以て。二諦相資の妙宗末世相應の要法を御弘めなされたで。慧眼見眞と呼ばれ玉ふも亦實に此に起目するのであります。

此の如く眞宗以外の諸宗派に於ては妻帯を許しませんから。隨て又其子孫があらふ通理はありません。依て其宗派に於ては。上は一派

の管長より下は末寺の住職に至るまで。悉く俗姓の異つた者が跡を繼ぐ様になりてをります。元より同一釋氏と云ふ邊からは差別はない様なもの。其俗姓は皆な異つて居ります。例へば茲に本誓寺と云ふ寺があるとせんか。其住職には先住は中村某と云ひ。現住は岡林某と稱へ。後住は西山某と呼ぶと云ふ様に。同ト一寺の住職も異姓相繼ぐ次第になりており。其住職も中には二十年三十年と永く勤めらるゝ人もあり。或は二年三年にして交代せらるゝ人もあり。甚しきは數年の間に三四人も代らるゝと云ふ様なこともあります。

眞宗（此下眞宗十派中主として東西本願寺に就て云ふ）は本と高祖聖人が一度肉食妻帯の在家示同の宗風を御開きなされてより。代々相承の善知識は。宗義の御相承は申す迄もなく。其血脈をも御相承あらせられて。本願寺派の管長は高祖の御血統でなければ出来ぬと云ふ都合になりて居ります

から。本願寺と大谷家とは餘程親しき關係がありまして。今日全國百萬の御門徒は悉く祖師聖人の御門徒たると同時に。高祖の血脈を承け玉ふ本願寺の御住職即ち一派管長の御門徒であります。そこで一派の管長たる法主猊下は。自餘の諸宗派とは大に其趣が異にて一宗開闢の祖師聖人の宗義と血統とを代々相承し玉ふ善知識でありますから。其門徒が崇敬心の篤き道理も亦茲にあるのであります。而して其御門徒を預かり居る末寺も。歴史上より之を考ふれば。非常の場合を除くの外は。大概は子孫相繼で住職する様になりて居て。其寺と其住職の俗籍とは餘程密着の關係がありて。例へば西行寺と云ふ寺を中井某が住職すれば。永く中井家が其寺の住職を前後相繼ぎて行きます。そこで門徒たるものも。亦非常の場合を除くの外は。祖先以來の門徒でありまして。寺檀族籍の關係が。祖先以來

の寺なり門徒なり。祖先以來の師匠（教を施く）なり弟子（教を聞く）なりであります。是故に寺檀師弟の關係がよほど親しくて。法施財施に大に關係ある所以であります。已上は歴史上其關係を述べた丈けであります。將來佛教は何れの宗教制度に倣ふべきものか。眞宗も其何れに依るべきものかは。今私は辨トしません。併しながら寺に住居するものは必ず智徳兼備の人ばかりと云ふ譯には行かず。其子孫も必ずしも衆に勝れた人ばかりではありません。今日の如く日に進み月に歩み。百事繁多の世の中に。特に宗教界は非常に瀕繁にして。内憂外患交々起る時に當り。過去の歴史（維新）に於けるが如く。唯た法事や葬式さへ出来れば充分と云ふ様な愚を學ぶべき時代ではありません。是故に本山は教學振起の方針に向て大に注意せられてあるから。末寺の僧侶も致々汲々と勉強せねばならぬ時であ

ります。そこで檀家信徒たるものも。成る丈け其寺に居る人をは補佐して。充分教導の任に堪へ得る様にして。住持の本分を盡される様にせねばならぬ義務があります。然るに中には此方の御住職は法事や葬式さへ出来れば充分で。説教が聞きたければ他所の教師を頼む。又餘計な學問をせらるゝと本山の御用を勤められたり。他所へ説教に行かれたりするから。財寶を積て他人に與へる様な者など愚な感念を起す人がありますが。若しも天下の門徒が皆此様な考へを起し。天下の住職が皆此心になりたら。説教一席聽く事も出来ませぬ。なせなれば互に其住職は他所へは出さぬ。此方のは知らぬと云ふのであるから。そうなれば第一自身も御法を聽く事が出来ぬから。御淨土参りも出来ませぬ。而已ならずそうなれば本山の御役を勤める者もなければ。後進を導く學者もなく。布教傳道する教

師もなくなりて。遂に佛法は滅亡してしまひます。左すれば斯る我儘の考は。正當の住職を造へるのではなうて。佛法を破滅する事になりませぬから。佛教信徒たる者は深く警戒すべき事でありませぬ。

第五章 結 論

上來辨ト來た如く。住持と云ふ語義は汎く教法を信仰する者に被る言葉でありますから。此邊から云へば出家も在家も悉く住持であります。併しながら専門に自信教人信の事ばかりに身を委ねる邊から云へば。出家の異名となりませぬ。寺院の住職たるものは一方には教法を護持し。一方には寺院を維持する責任があります。そこで住職と云ふ言葉の中には。佛法護持の職分と云ふ意味と。寺院維持の職分と云ふ事とを含んで居ります。又檀家信徒たる者は世事にからまれて。自ら佛典を研究し教法流通の任に當る事が出来難いゆへ

住職をして其代りをして貰ふのでありますから。成る丈け其住職を補佐して。相依り相助けて教法を弘通し。寺院を維持して行かねばなりません。

然るに世には一寺の住職でありながら。道徳もなく氣力もなく。勿論高尚深遠なる佛學は申す迄もなく。世間普通の智徳さへもなく。見識もなければ主義もなく。中興上人が一卷ノ聖教ヲマナコニアテ・ミルコトモナク。一句ノ法門ナイヒテ門徒ヲ勸化スル義モナシ。夕・朝夕ハヒマナチヲヒテ。マクラナトモトシテチフリフセラント。マユトニモテアサマシキ次第ニアラスヤ。シツカニ思案ヲメクラスヘキモノナリと御誠めなされたる如く。法事葬式の外に用事はなす者の様に考へ。閑暇さへあれば將碁や圍碁の遊戯を爲し。遊逸安逸に月日を送り。自身に才能がないばかりでなく。人の能を妬み

人を毀り。偶々其職分たる法事葬式に趣きても。大酒を飲み。大飯を食ひ。言葉は結ばれ。顔は眞赤に。足は千鳥になりても。耻かたひとも思はぬ者があります。此等は實に獅子身中の蟲と云はねばなりません。斯様な事を如來様は豫て御存知ぢやぞ。蓮華面經の中には復有比丘往姪女家姪比丘尼貯蓄金銀造作生業以自活命復有通致使驛以自活命復有專行醫藥以自活命復有圍碁六博以自活命復有爲他卜筮以自活命復有爲他誦咒驅遣鬼神多取財物以自活命復有專行殺生以自活命復有私自費用佛法僧物以自活命復有內實犯戒外示護持受人信施復有秘悖僧物不與客僧復有恪惜僧房牀座不與客僧復有比丘實非羅漢而詐稱羅漢欲令人知多受供養但爲活命不爲修道復有興利商賈以養活乃如是無量地獄因緣捨

命之後皆墮地獄譬如師子身肉所有衆生不敢食彼唯師子
 身自生諸蟲還自噉食師子之肉佛告阿難我之佛法非餘能
 壞是我法中諸惡比丘猶如毒刺破我三阿僧祇劫積行勤若
 所集佛法と御説きなされた。斯の如きものは佛法の弘通を妨ける
 大惡魔であります。斯様なものが住居すれば。折角如來様を御安置
 申してある寺院も。伏魔殿となりてしまします。斯かる場合に於て
 は。檀家信徒たるものは大に注意を加へて。充分に正法弘通が出来
 る様にせぬばなりません。如來様が涅槃經に以是緣故我聽國王
 群臣宰相諸優婆塞等護説法人と仰せられたのは此處であり
 ます。

翻りて今日の檀家門徒たる人を見るに。中には僅かなる苦情を云ひ
 立て。若くは少々の過失を仰山らしく云ひ難して。僧侶を蔑視し之

を苦しめ。一本鎗には門徒を斷るの。他の御住職に依頼するのと云
 ふ様なことを云ふ人がありますが。此等は誠に公明正大の人ぢやと
 は云はれますまい。何故なれば人として多少の過失のない者は一人
 もありません。若しも何事も一点の過失がない人なれば此は即ち儒
 道に所謂聖人でありませぬ。苟も聖人でないならば。必ず多少の過
 失があるのは當然の事であります。然るに動もすれば何とか彼とか
 云ふて。住職や僧侶を苦しめると云ふは。實に知恩報徳に心掛のあ
 る人とは申されませぬ。心地觀經には一切衆生は悉く父母國王三寶
 衆生の四恩を蒙むる事を御説きなされ。又淨土の觀無量壽經の中に
 は。孝養父母奉事師長は。三世諸佛が佛けにふられた。正因の隨一
 ぢやと御説きなされてあります。我御開山は如來大悲ノ恩徳ハ。身
 ナ粉ニシテモ報スヘシ。師主知識ノ恩徳モ。ホ子ナクタクキテモ謝ス

ヘシと仰せられ。報恩記には畜生の恩を報つたる事を御擧げなされ
 て其次に。畜生ナチカクノコトシ。イハンヤ人ニ於テチャ。畜生ハ
 愚ナル心ナリ。人ハタフトキ生ナルカ故ナリ。今生ノ患難ナスクフ
 ナチソノ報酬チイタス。イハンヤ文字チナラハンニ於テチャ。浮生
 ハ一旦ノ果報ナリ。遂ニハタモツヘキ身命ニアラス。文字ハ法身ノ
 假名ナリ。智解チ生スル源ナルカ故ナリ。タ、文字チ學セルソノ恩
 ナチオモシトス。イハンヤ佛教チナラヘル徳ニ於テチャ。文字ハタ
 、智チ發スル源ナリ。佛教ハ未來ノ了因ノチ子トナルカ故ナリ。只
 總シテ今生ノ名利ノ爲ニ佛法習學セン。ナチ了因ノ佛性トナルヘシ
 イハンヤ後生菩提ノ爲ニ彌陀ノ法チサツケラレテナカク生死チ超斷
 シテ永生ノ樂果チ期センニ於テチャ。マコトニ恒沙ノ身命チステ、
 モ報スヘシとあります。斯の如く經論釋何れも師恩の廣大なること

をお示しなされてあります。然るに其廣大なる恩をは恩とも思はず
 事に寄せ機に就けて師僧を苦しむる輩は。實に何とも云ひ様の無ひ
 人と云はねばなりません。是は畢竟眞實に佛法に心掛の薄いから
 起るので。美しく他力信心の頂かれた人は。決して斯様なことはな
 るはずであります。御文章には彌陀願力ノ信心チ獲得セシメタラン
 人ノウヘニナイテコソ。佛恩報盡トモ。マタ師徳報謝ナンドトモマ
 ウスコトハアルベケレとあります。信心がなふては親摯を報謝
 は勤まりません。故に又の御教化には。祖師聖人御相傳一流ノ肝要
 ハ。タ、コノ信心ヒトツニカキレリ。コレチシラサルチモテ他門ト
 シコレチシレルチモテ。眞宗ノシルシトスと仰せられた。夫れ故折
 角御開山の御門徒と云はれ。大谷の清き流れを汲みながら。邪見憍
 慢のみ月日を送りて。空しく三途に歸る様では。御開山に對して

申し譯がないばかりでなく。寶の山に入りながら空手で歸るも同然
 でありますから。當流に御流れを汲まして貰ふた所詮には。先づ他
 力の大信を獲得するが何よりの肝要であります。其上からは報恩謝
 徳の志を以て。此妙法を汎く他人に及ぼすと云ふ心掛がなうては
 なりませぬ。

已に本願には十方衆生と仰せられ。成就文には諸有衆生とあるから
 は。如來の御慈悲は決して一國一郡一村一寺一人と局りた御法では
 ありません。因縁のある處何れへも行きわたらせふの御思召であり
 ますから。苟くも此教に流を汲む人は。自信教人信は我が本分ぢや
 と決心し。別して住職たるものは。其名の如く實際にも充分其職責
 を盡さねばならぬと心掛け。檀家門徒たるものも。出来る丈け御報
 謝をせねばならぬと心得たら。乃ち佛教は旭日の東天に昇る勢で弘

まるに相違ありません。是が即ち住持佛法であります。其佛法を住
 持する功德の廣大なることをば。釋迦如來は十輪經の中に偈を以て
 有眞善刹利 供養於正法 三乘得熾盛 當獲功德海
 具足七寶等 徧滿閻浮提 持用施諸佛 其福猶有限
 乃至四天下 造僧房供養 彼雖得大福 不知護正法
 縱使爲諸佛 滿中造塔廟 彼雖得大福 則竭煩惱結
 譬如五日出 能竭於大海 若護我法者 亦滅諸煩惱
 譬如風災起 悉摧一切山 若護正法者 亦消諸煩惱
 譬如水災起 漂蕩壞大地 若護正法者 亦消諸煩惱

御説きなされてあります。何と廣大なる利益ではありますせんか。如
 來の遺弟たるものは我々毘勉せねばなりません。御經の付囑流通と
 云ふは。己が滅後に己に代りて此法を弘めて呉れよの思召で。世間

B-92

で云ふ遺言であります。近くは大經は彌勒菩薩に。觀經は阿難に御
付囑なされて。其より以來傳燈知識の護持に依て吾人は此妙法を聞
かして貰ふたのでありますから。我々は又此を住持して普く人に傳
へねばなりません。上來聊か愚見を述べて同朋に告ぐ。

明治卅三年十二月十七日印刷

同 年 同 月 二十日發行

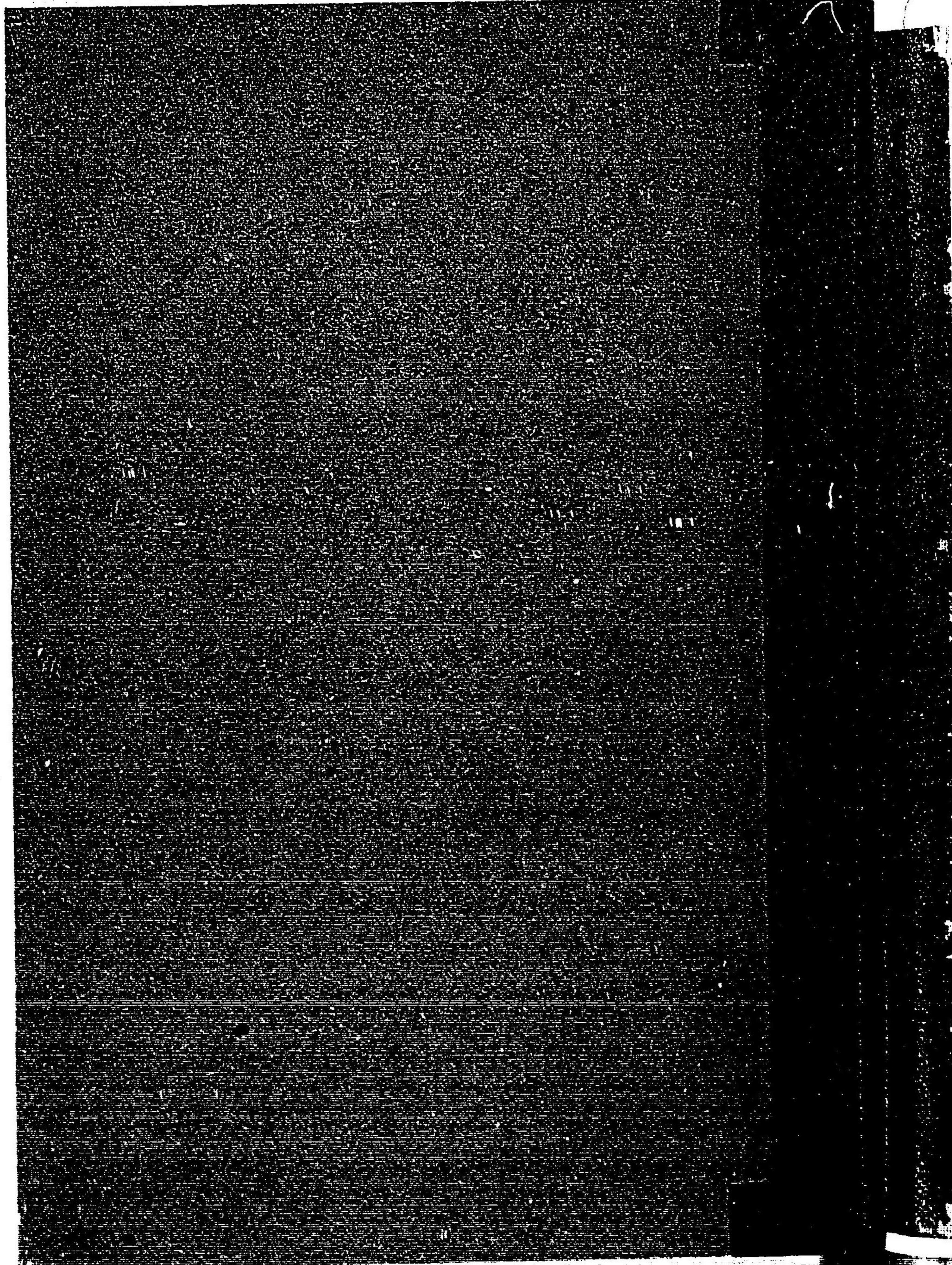
山口縣周防國玖珂郡由宇村百九十八番地

著述兼發行者 中 谷 渡 月

京都市木津屋橋通堀川東入三十四番戶

印刷者 井 出 時 秀

不許複製



47

7

住持の本領

中谷渡月

国立国会図書館

016037-000-3

特47-727

住持の本領

中谷 渡月/著

M33.12

ABC-1877



7